

報道機関 各位

記者提供資料

2023年(令和5年)1月24日

文化財担当課長 稲原

(918-5629)

東野町で市内初めての弥生時代高地性集落を発掘

このたび、開発事業に伴い、明石市が埋蔵文化財発掘調査を行っていた明石市東野町にある東野町遺跡から、弥生時代後期の高地性集落が発見されました。

調査地点は、山陽電鉄大蔵谷駅北北西約650mの位置に当たり、標高約40mの段丘が平野部へと下っていく縁辺部に立地しています。

調査した面積は、約1600㎡で、朝霧川へと向かう北西から南西にかけての谷に面した台地の縁辺部と斜面部で、弥生時代後期後葉(紀元2世紀)の竪穴住居跡が2棟確認されました。

1棟は台地の北縁部にあり、台地縁辺部に沿って検出されたもので、平面形態が5.7×5.8mの隅丸方形を呈していました。検出面から床面までの深さは約60cmで、住居内の壁際は、約70cmの幅で一段高くしたベッド状遺構が全周していました。壁の裾には周壁溝が巡っていました。住居床面の四隅には直径30～40cm、床面からの深さ50～60cmの柱穴が検出されました。また、住居の中央部には直径約60cm、深さ約30cmの円形の土坑と、幅40cm、長さ90cm、深さ約10cmの長方形をした土坑が確認されました。これらは、1〇(いちまる)型中央土坑とよばれるもので、播磨地域で特徴的なものです。

住居の床面直上では、中心から放射状にのびるように垂木材と見られる炭化物が見つかったことや、埋土に焼土が多く含まれていることからこの住居は火災で焼失したものと見られます。

住居内の四隅には弥生土器の甕や高杯、鉢などがほぼ完全な形で残されており、当時使用していた状態で火災に遭ったことが伺えます。土器は、いずれも弥生時代後期後葉から終末期にかけてのものに位置づけられます。

他の1棟は、一つ目の住居跡から約5m北側の斜面中位に立地しています。東西幅は約5mで、北側は斜面で流失しているため、現存しているのは南北約4mでした。斜面を削り込んで作っており、床面までの深さは約60cmを測ります。住居の中央はやや低く、中央東寄りに柱穴が見られます。中央土坑は検出されておらず、柱穴の位置から2本の柱によって屋根を支える構造であったと伺えます。

埋土内からは甕や鉢が出土しており、これらの時期からもう一つの住居とほぼ同一時期の建物であったことがわかりました。

この二つの住居は、水田耕作が可能な朝霧川周辺の沖積地より、約 30m 高い台地上に位置しており、周辺に水源となるものがないことから、いわゆる高地性集落であるといえます。これまで明石市内では、弥生時代の土器が出土することはありましたが、完全な形で住居跡が見つかった事例はなく、さらに、高地性集落としても初めての事例となります。

調査地の周辺では、東に約 2.5 km の地点に、同じ高地性集落である舞子・石ヶ谷遺跡が存在しています。この集落は六甲山の南麓に分布する高地性集落の最西端にあたり、摂津地域との関連が強い集落とされています。

今回、東野町遺跡で見つかった竪穴住居は 1〇型中央土坑をもつことから、播磨地域の影響を強く受けていたことがわかります。これまでの 1〇型中央土坑の分布域でも東端部に位置しており、弥生時代後期から終末期にかけての当地域の文化圏のあり方を知る上でも極めて貴重な資料となりました。

用語解説

高地性集落

弥生時代中期・後期に平地より数十m以上の比高差があり、平野など周囲を眺望できる見晴らしの良い山頂や丘陵の尾根上などに形成された集落です。その機能については、見張り場、逃げ城、交易など、さまざまな説があります。弥生時代中期には中部瀬戸内沿岸、大阪湾岸にかけて多く、弥生時代後期になると、近畿とその周辺地域に限定されています。かつては中国史書の「倭国大乱」と関係づけて戦いに備えた集落と考える説が有力でしたが、弥生時代の各時期の年代観が変わったことから、近年は、平野部の集落とセットで捉える見方も出てきています。

1〇型中央土坑

住居跡の中央部に、細長く、浅い土坑（1型）と円形で深い土坑（〇型）とがセットになったもので、播磨地域の弥生時代の住居跡によくみられるもので、岡山上県東部や徳島県、香川県でも確認されています。細長い土坑は炭がつまっており、暖をとるための穴で、円形のものには灰が詰まっており、煮炊きの炉として使われたと推定されています。

東野町遺跡

東野町遺跡は、海岸線から約 800m 北側に位置する標高約 30m の中位段丘上に立地した遺跡で、今回発掘調査をした地点より約 150m 南で行った調査では、7 世紀中頃の掘立柱建物跡や溝、土坑等が見つかっており、須恵器杯身や飯蛸壺、製塩土器の他、結晶片岩製の棒状石製品が出土し、海人の集落であったと考えられています。

7 世紀後半にこの遺跡より、西約 500m にある太寺廃寺が創建されますが、その建立にも関わった可能性が指摘されています。



竪穴住居跡 遠景（北から）



竪穴住居跡（西から）



竪穴式住居 遺物出土状況（南から）



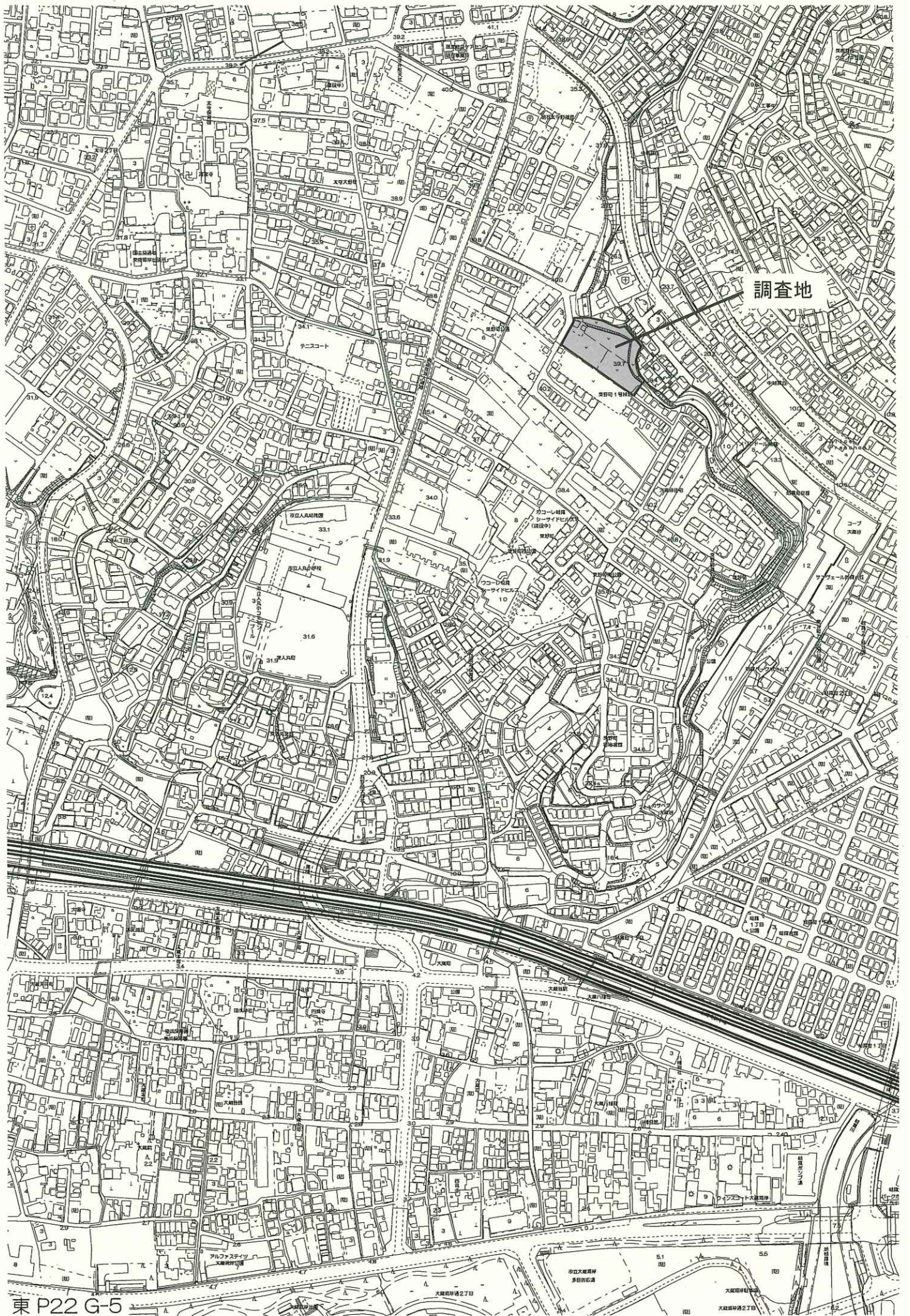
竪穴式住居（北西）遺物出土状況（東から）



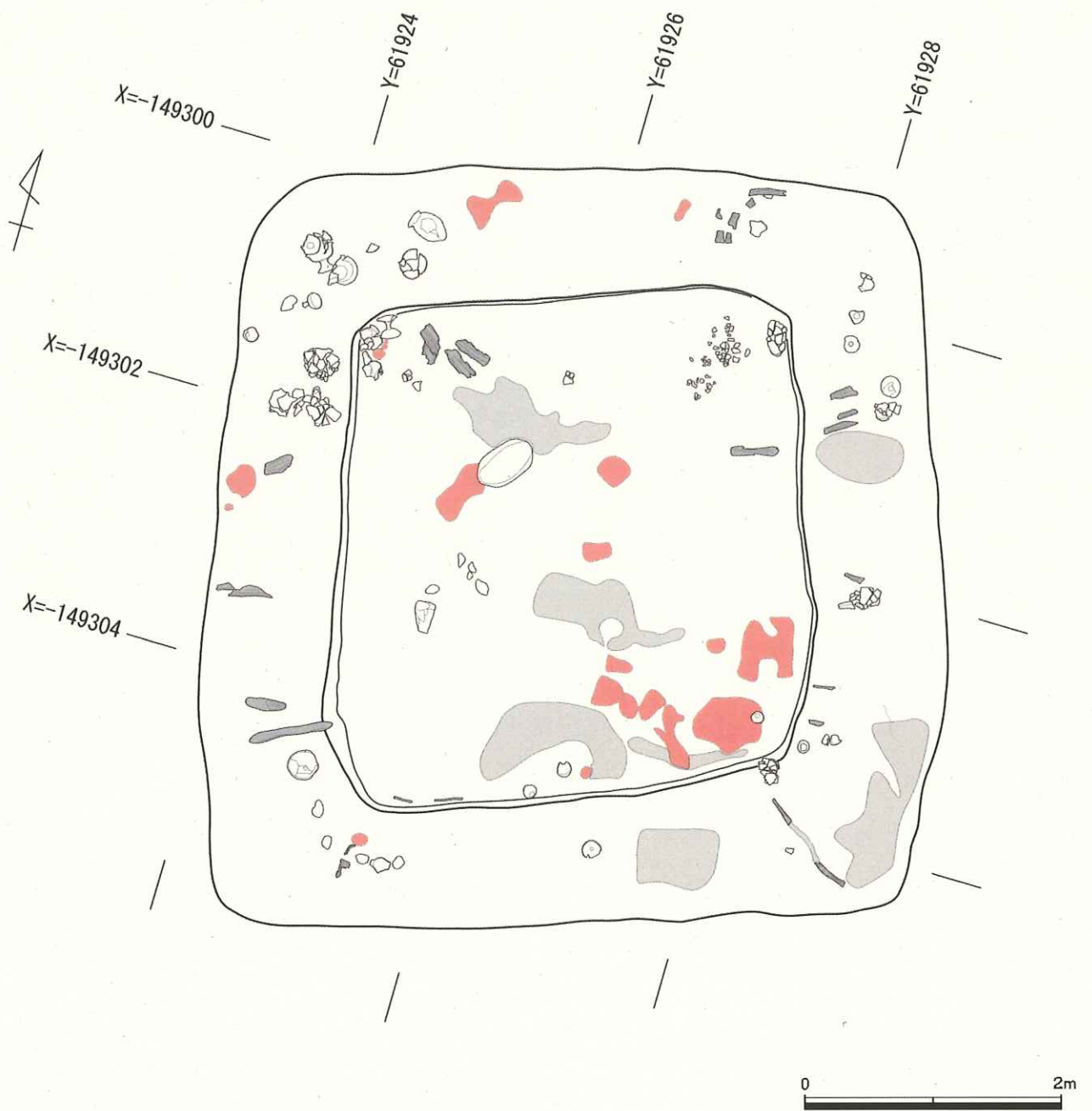
竪穴式住居（東から）



遺物出土状況（東から）



調査地



Ⅱ区 SI1101 遺物出土状況図 (S=1/50)